



ね、ヒツジの
絵をかいて



saolipooH

夏休み

「ね、ヒツジの絵をかいて」

このセリフは、サン・テグジュペリの『星の王子様』で、王子様が「ぼく」に初めて言うセリフであり、

私の生涯初めての読書感想文の冒頭の出だしである。私は、読書感想文を書くにあたり、教科書に載っていたあらゆるテクニックを駆使して、読書感想文において最高の出だしを演出したのである。それは、私が小学校2年生の8月31日。夏休み最後の日の夜のことであった。

私は、その夜、泣きながら母に告白した。夏休みの課題の朝顔の観察も、日記も、ドリルもすべてきちんとかなしたのに、なんと、あろうことか、自由研究をまるっきり忘れており、すっかり何

もしないまま、最終日の夜になってしまったのである。今から考えれば、夏休みの自由研究を子供がやってるかやってないくらい、親ならもっと早くに気づいて注意してもよさそうなものだ

が、我が家は3人姉妹で忙しく、夏休みの間もクラブだ塾だとイベントだらけだったので、母もすっかりしていたのかもしれない。とにかく、母は、私の涙ながらのその告白を聞くと、冷静に

言、こう言った。

「読書感想文を書きなさい。」

私は、小さいときから本を、というよりも文字を読むことが好きだった。車に乗れば、ずっと窓の

外をながめ、流れる町の看板の文字をながめることが好きだった。もちろん、平凡な小学2年生が読める漢字はたかがしれていたが、なんとなく、文字を目にして、こういう意味なのかな、と想像することが楽しかった。そして、実際に本もかなり読んでいた。そこで、母が、短時間で私ができる自由研究として読書感想文を選んだのは、かなり適切な判断だったように思える。

もう夏休み中にたくさん本を読んだのだから、あとは心に残った1冊を決定して、それについて文字を書けばいいのだ。幸運なことに、私の教科書には「読書感想文の書き方」なる項目があり、まだ習ってはいなかったけれど、母に言われるままに感想文を仕上げることは、難しかったけれども、できないことではなかった。実際、何をやっても不器用で、一晩で貯金箱やら模型やらを作ることはとうていできない私にとっては、夏休み最終日にできることといえば、作文を書く

くらいなもので、その点、母は賢かったのである。

私は、教科書を読みながら、見よう見まねで読書感想文を書きあげた。効果的な書き出しが良い、そのためには、冒頭にセリフを持ってくるのだ、と書いてあったから、その通りにした。あら

すじを書くのではなく、自分の心に残った場面について、どう思ったかを書くのだ、と書いてあ

っ

たから、その通りにした。私は、『星の王子様』に登場してくるあらゆる滑稽な大人たちを、動物を、植物をととても気に入った。なかでも、数字を数えるばかりなのにエラそうな学者や、一人ぼっちしかいない星で、訪れた人をみんな家来だと思える一人ぼっちの王様など、かわいそうな大人の姿が心に残ったので、そのことを書いた。そして、「もし自分が登場人物だったら」と想像して書きなさい、と教科書にあったので、その通りに、「もし私が星の王子様だったら、登場人物たちを大切にします」と書いた。

翌日、つまり、夏休みがあげて新学期のはじめの登校日になった。私は、不安な気持ちをいっぱいに登校した。もちろん、気がかりなのは夏休みの自由研究の提出である。学校へ登校する子供たちは、みんな大きな荷物を抱えながら歩いている。牛乳パックでつくったロボットや、観察日記を書いた朝顔、実験のレポートをまとめた大きな模造紙などである。他の友達の立派な自由研究の成果を目にするたびに、私は、小さな体から大きなため息をついた。私は、ぺらぺらの原稿用紙5枚程度の読書感想文が夏休みの自由研究なのだ。

自由研究を提出した午後、私は担任の先生から職員室へ呼び出された。私は、おとなしい性格で、職員室に呼び出されたり、先生に怒られたりしたことはなかったから、恐ろしさに震えた。「やっぱり、自由研究が読書感想文なんて、ダメだったんだ。」「ママは、なんで読書感想文を書きなさいなんて言ったんだろう」と、すっかり宿題をさぼっていた自分のことは棚にあげて、恐怖と恥ずかしさに、体中をドキドキさせて職員室へ向かった。担任の先生は若くてきれいな女性の先生だった。いつも優しく、特に私のようなおとなしくて、いたずらなんて手のつけかたも知らないような女の子に、怒った顔など見せたことがないような先生だった。しかし、

そんな先生が、厳しい顔をしている。眉を寄せて、真剣な面持ちで、職員室にやってきた私を迎えた。私は、先生が何を言っているのか、ほとんど聞こえていなかった。胸にあるのは、初めて先生から怒られた、ということばかりで、自分の恥ずかしい、という想いばかり胸にあったので、先生の言葉は耳に入らなかった。それでも、「お母さんに連絡をした」「今日の夜、親と一緒にもう一度学校に来なさい」ということは分かった。私は、こんなことになるとは思わず、のんきに過ごした夏休みをうらめしく感じ、それと同時に、そんなに怒られるようなことだったのかと、夏休みの自由研究というものの重要性を甘くみていたことを悔やんだ。

重々しい足取りで家に帰ると、母は大慌てだった。小さな妹が二人もいるなか、自分も外出する準備をしなくてはいけなかった。服を着替え、化粧をし、夜ごはんが遅くなるかもしれないということで、私はめったに食べさせてもらえないインスタントラーメンを母に作ってもらって食べた。インスタントラーメンは、父が夜遅く帰ってきたときによく食べていたが、子供には体に悪いからというので、ほとんど食べさせてもらえなかったのである。ラーメンを食べたら、母が運転して私を車で夜の学校まで送ってくれた。

日が暮れてから学校に行くことは、小学校低学年の子供には、あまりない経験である。私は、その恐ろしさに肝を冷やした。どこもかしこも真っ暗で、職員室と一部の教室だけ、蛍光灯の

ぎらついた灯りで照らされているが、それがその教室だけ浮き上がっているように見えて怖い。私は、母に連れられて暗い廊下を歩くと、職員室へ向かった。担任の先生は、私を迎えて、私たちの馴染みの教室へと向かった。母は、後で迎えにくることを約束して帰ってしまった。もちろん、小さな妹たちの面倒をみななければならないからである。非常灯がぼんやりと照らすなか、暗い廊下と階段を通り、ようやく教室につくと、先生は電気をつけた。そして、先生と私しかいない二人きりだとやたら広い教室で、二人だけの課外授業が始まった。

私は、真っ赤に線をひかれた自分の夏休みの自由研究である、読書感想文をつきつけられた。そして、先生は、赤い線をひいた箇所について、いちいち質問をした。

「ここは、どうしてこんな風に思ったの?」「これは、こう書いてあるけど、なんで?」「もっと

簡単に言うと、どういうこと?」

私は、先生の質問に一生懸命答えた。先生は、その答えを書きとって、作文を書きなおすように私をうながし、私は先生の言うままに作文を書きなおした。

そんな一日から、二か月ほど経った秋の日、私は、校長先生から、全校生徒集会のなかで表彰された。大田区の読書感想文コンクールに入選して、「おおたく」という優秀作品集に私の読書感想文が掲載されることになったというのだ。実は、夏休み明けの登校日に、私が先生から呼び出されたのは、私の読書感想文の出来があまりに良かったために、コンクールに出品しようということになり、先生が手を入れたかったためだったのである。

前にも言ったが、不器用で、牛乳パックやらつまようじやらで何かをつくったり、実験したりということが苦手だった私にとっては、自由研究で賞をもらうということは、奇跡としかいいよう

がないことだった。親は喜んでしまって、「おおたく」という文集を20冊ほど購入して、親戚に

配った。(1冊300円ほどだったと思う)私は、初めて、自分には、「才能」と呼べるようなもの

があるのだと確信したのである。それは、素晴らしい経験だった。

『星の王子様』の最後は、王子様は、自分の星に帰ってしまう。それも、とても悲しい方法で帰るしかないのだ。幼い自分は、そのことの意味が分からず、どうして、この本の最後がとても切ない調子を帯びているのか、「ぼく」の泣きたいような気持ちに溢れた文章の意味がよくわからなかった。だから「星の王子様は、死んだのではないと思います。王子様は、星に帰ったんだと思います」という私の読書感想文の最後の文章は、大人を泣かせるための演出ではなく、子供の本当に素直な感想だった。けれど、今、読み返してみると、どこかこまっしょくれた、今の自分のスタート地点を見るようで、恐ろしい。サン・テグジュペリは結局、『星の王子様』という素晴らしい作品で、悲しい大人への道を私に示してしまったのかもしれない。それでも私は、ドラマに満ちたあの経験を忘れることができない。

